コロナ禍で知る＜環境デザイン＞の果たす役割と可能性

― 3人の研究者と語る ―

自宅で過ごす時間が増え，室内の環境や近所の環境といった身近な場所のデザインに，今まで以上に重要性を感じることとなりました。そこで，環境デザイン分野に関連のある3人の研究者と，環境デザインが社会に果たす役割，そして生活環境学科の6コースの1つである「環境デザインコース」の魅力について語り合いました。

北村薫子　×　岸川洋紀　×　佐々尚美　×　三宅正弘（コーディネーター）

＊教員の詳細は，本誌の教員プロフィール参照　（本文編集　竹本由美子）

―――今回はコロナ禍での対談となったことから，密を避けて各教員とオンラインで語り合うことになりました。最初に，建築環境工学の中でも光環境を専門とされる北村薫子教授に，現状から見えてくる環境デザインの重要性についてお聞きします。

三宅　まずはインタビューを始める前に…北村先生は現在どちらから参加されているのですか？

北村　今は，京都府の丹後半島でワーケーションをしているところです。

三宅　コロナ禍でオンラインによる情報共有が気軽になり，様々な場所で授業や仕事もできるようになりましたね。今まで想像もしていなかったような時代になりました。

北村　そうですね，便利です。どこにいても仕事ができると，暮らし方がかなり変わりますね。

図1　ワーケーション先より対談される北村薫子教授

「内」と「外」を意識した環境デザインの重要性

三宅　でも，このようなコロナ禍の中で環境デザインの重要性にも気づかされる場面は多いのではないかと感じます。室内で過ごすことが多い中で，少し気晴らしに近くの公園や外に行くことも特別なことになり，「内」と「外」をとても意識するようになったと感じます。今まで私たちが忘れていた身近な室内外の環境が，これほど注目される時代になり驚きですね。北村先生は，専門のお立場から現状をどのように感じていますか？

北村　建築環境工学では，いわゆる「光」「熱」「音」のように研究分野で分断しがちなのですが，それらを実生活ではトータルで考える必要があるのだと考えさせられる機会になりました。急激に様々なことが変わってしまって必要に迫られたこともあり，意識しながら授業をしているところです。

三宅　トータルで考えるというのはどういうことでしょうか。

北村　例えば，今まで「窓」は透明なもので太陽の光を取り入れるものですよ，と授業で伝えていましたが，今は太陽の光だけでは無くて，換気の必要性や，家に閉じこもる生活の中でも窓から外との繋がりを感じる重要性も伝えないといけません。最近は，インテリアとして植物を育てたり取り入れたりする人も増えていますよね。このような「外」との繋がりを室内に持ち込む行為は，室内で長時間過ごすことが多くなった生活の中で，自然と自分を守るためにしていることではないかと感じています。

三宅　私もベランダで食事をしたりするなど，テラスで過ごしたくなりました。ベランダを改修して食事をする場所にしている人も増えているようです。

北村　そのようですね。どのような工夫をされましたか？

三宅　特別なことはしていなくて椅子とテーブルを置いただけですが，今までは洗濯物を干す場所だったところが食事のスペースに変化しました。おっしゃるとおり，「窓」というものが外の景色，外との繋がりを感じさせるものになっていて，建築の一部というより住環境の役割も担っているということですね。生活環境学科は，様々な事象をトータルで考えることに適している学科ですし，学生にとって学んでほしい視点です。では，先生の研究分野で，コロナ禍においてパラダイム（物の見方・考え方）や検討方法が変わったということはありますか？

北村　とてもマニアックな部分ですが，昼間でも室内で過ごすことが多くなり，照明光の色（色温度）の好みが変わってきたと言われています。以前は温かくて癒される電球色と言われる色が好まれていたのですが，現在は少し白っぽい太陽光に近い光を好む傾向に変わってきているようです。コロナ禍と関係する研究データとして立証されてはいませんが，電球を購入する際の選び方の傾向が少し変わってきて，電球色よりやや白っぽい光の色の「温白色」が増えたという報告例があります。

三宅　コロナ禍の影響によっていろいろなことを見直す機会にもなっていますが，「外」にあった植物を「内」に取り入れ，

逆に「外」を食事をする「内」のスペースにするなど，「外」であった環境を自分達の住環境の「内」に取り入れることが多くなっていることは，コロナ禍による変化と言えるかもしれません。

コロナ禍で得られる生活環境の広がり

三宅　在宅ワークなども推奨されている中で，「自宅」が見直されていることについてはどのように感じていますか？

北村　生活者の視点から言えば，「居心地」を良くしようということにも積極的になりましたし，住空間をより清潔に保つことを心がけるようになりました。

三宅　このコロナ禍において，仕事が「外」から自宅に入ってきましたが，もともと自宅で余暇や趣味の時間も過ごしていた人にとって，自宅で自粛する生活はどのように感じているのでしょうか。

北村　人にもよると思いますが，例えば他の人と交流する文化や芸術系の活動は，不要不急として急に止まった部分があると思います。その活動を自宅の中で個人がいかに維持できるか，家の構造や周辺の住環境の影響も受けるように感じます。

三宅　サードプレイスとして生活，職場，趣味の場という３つの視点からみても，すべてを家の中で過ごすには苦労することもありそうですね。

北村　その中で，例えば車をキャンピングカー仕様に改造にすることも考えました。自転車やパソコンを持ち込んで，他の場所に自分で趣味の場や職場を移動させるということです。

三宅　そうすると，コロナ禍で生活パターンや行動範囲は逆に広がったとも言えるのでしょうか。

北村　そうですね。自分が過ごす生活の範囲を外に持ち出して広がった感じですね。

三宅　学生の皆さんにも，コロナ禍における生活環境を考えてもらうにあたっては，「環境の広がり」を感じてもらえているのでしょうか。

北村　私も知りたいですね。学生にとって生活環境は果たして広がったのか狭まったのか，聞いてみたいです。ご自身はどう思われますか？

三宅　自宅にパソコン環境ができたことで，家で過ごす時間が多くなりました。ただ，長く室内で過ごすからこそ，窓から見える山や緑の景色が大切であることを感じさせられます。

北村　そうすると，家という「建築」を選ぶのか，家がある「場所」を選ぶのか，自分が暮らす環境を選択する時の条件がこれから変わってくるように感じます。

三宅　確かにそう感じます。ポストコロナでは「場所」が注目されるのではないかと。以前から建築の分野で言われていた南側に窓を設置すれば良いという考えも変わりつつありますし，同じように変わってくるでしょう。

北村　あとは，「便利な街」という価値観が変わってきたと感じます。交通の便が良いことが魅力ではなくなってきたのではないでしょうか。

三宅　先生は交通の便が良いところにお住まいですが，やはり考えが変わりましたか？

北村　コロナ禍で電車に乗らなくなったので，これほど電車が多く乗り入れる都会に住むメリットが感じられなくなりましたね。一方で，徒歩圏内に何があるか，窓からどのような景色が見えるか，といったちょっとした周りの環境の大切さを感じるようになりました。

三宅　そうなると，家の選び方もこれから変わってきますね。

北村　従来は仕事を引退したらどこに住むかと考えていたものが，これからは仕事をしながらどこに住むかと変わるように感じます。

三宅　学生に将来どこに住みたいかを聞いてみると，意外にも「郊外」が多く，私達とは異なった考えを持っているようなので詳しく聞いてみたいですね。世代の違いかもしれませんね。

壁を越えたコミュニケーションの面白さ

三宅　このようなコロナ禍で建築環境を学ぶ魅力について，学生にはどのようなことを伝えたいですか？

北村　このようなコロナ禍は不幸な状況ですが，本来取り組まないといけなかったことや仕事のオンライン化といった今まで先延ばしにしてきたことなど，急激に大切なことに気づかされた機会でもあります。環境という面では，エネルギーの大切さや多くのゴミが出るような暮らし方を変えていくといった考え方を大切にして欲しいです。我慢するばかりでなく，そこから新しい行動を生み出す機会になればと思います。

三宅　アパレルを学ぶ学生の中でも，衣服の廃棄の問題に興味を持っている人が多いです。

北村　そうですね。学生の方が本当に良く知っていて，教えてもらうことも多いです。使い捨てだった世代とは違いますね。

三宅　現在の北村先生がおこなっている研究のトピックスは何でしょうか。

北村　今年度は，毎年実施している光環境デザインシンポジウムでの建築家と光環境研究者との対談が 20 周年の節目を迎えたので，この 20 年の建築の光の変化を総括することを検討しています。

三宅　建築家と光環境の研究者の間で，かみ合わないことが多いのはなぜでしょうか。

北村　建築家は建築物を総合的に理解して具体的に設計し建築する立場，建築環境工学の研究者は建築のある部分の理想を探求していく立場で，アプローチが異なっているために，かみ合わない部分が出てくるのだと思います。しかし，見ている世界が異なる両者が意見交換するととても面白いことに気づかされます。

三宅　生活環境学科でもそれぞれの立場の先生がいますね。

北村　そうですね。生活環境学科はまさに，実務の建築家と建築環境工学の研究者が建築に取り組んでいく視点を学生に提供できるので，今後も教員間で連携していきたいですね。我々が，そのような機会をつくらないといけないと思っています。

三宅　学生にはどちらの視点も持って欲しいですね。

北村　そういった考えから，最近は卒業研究に「制作」も取り入れています。建築を本格的に設計するところまでできないけれど企画提案をしたいという学生も多く，そのような学生には，研究からスタートしながら目に見える形で「制作」しアウトプットするように指導しています。学生はシステマチックなカリキュラムの中で各分野に分かれて卒業研究をしていますが，学生の興味の幅が想像以上に広がりがあるので，教員の立場からも広げてあげたいと思っています。

三宅　最後に伝えたいことはありますか？

北村　学生や教員，コースや学年，武庫女や他大学といった心理的な垣根を越えてコミュニケーションすることの面白さです。それが広がっていくと良いなと感じています。

――次は，生活環境中のリスクに対する行動や心理を専門とされる岸川洋紀准教授に，身近な環境におけるリスクだけでなく，メディアとの関係についてもお話していただきます。

三宅　コロナ禍でご専門の分野に何か変化はありましたか？

岸川　環境リスクの分野でも，コロナ関連のシンポジウム等が多く開催されています。これまでの経験を活かせば，社会がコロナに対してもっと上手く対応できると考えていましたが，リスクをテーマとして議論や研究をしてきたにも関わらず，今回のコロナ対応に活かせなかった点は反省し改善しなければならないと思います。

三宅　どのような部分が上手く機能していないのでしょうか？

岸川　リスクを科学的に評価するアセスメントと，評価されたリスクをどのように社会的にマネジメントするのか，という２つの視点から考えますと，アセスメントは，専門家が科学的にウイルスの性質や病状などを分析し様々なことが徐々に明らかにされており比較的うまく行われていると思いますが，マネジメントが上手くいっていません。国民もメディアも行政も，マネジメントやコミュニケーションにおいて失敗していると感じます。

三宅　メディアでもマネジメントは他人事で，アセスメントに対して議論する人が多いなと思います。マネジメントの必要性や提案しようという声が聞こえないのもおかしいですね。

岸川　おっしゃるとおりです。本来は行政が対処すべきですが，問題が専門的すぎることもあるのかもしれませんが，対応が追いついていません。そのような部分を本来はメディアが担うことで一助となるはずなのですが…。

三宅　メディア自身も，客観的に評価することなく全体をマネジメントできていないのでしょうね。

岸川　何か災害や事件があったときの危機管理におけるメディアの役割については，すでに 10 年以上前から問題視されていて，私もメディアの与える影響や役割について少し研究をしていました。メディアの抱える課題についても述べたことはあるのですが，今も実状を変えることができていないことに研究者として反省します。

三宅　そのような部分を理解している科学者が，もっとメディアに出て発信することも必要ですね。

岸川　確かにそうですね。科学者やエンジニアはどうしても政治や経済，報道といったところに関わることが苦手です。よくメディアに出ている人もいますが，冷静に科学的な分析や情報発信があまりできていないように思います。社会貢献を考えるのであれば，科学者の立場からもより積極的に問題提起や改善案を出すことが必要ではないかと思います。

図２　環境リスクとメディアについて語る岸川洋紀准教授

メディアと生活環境の関係性

三宅　岸川先生の研究室でも卒業研究のテーマとして，メディアに関することを取り上げていたように記憶しています。

岸川　最近は SNS が普及しているので，学生達はメディアによって消費行動がどのように影響を受けるかであったり，暮らしの中での SNS 疲れやストレスなどの心理的影響に関心があるようです。コロナ禍での報道内容についても，自分達の行動にどのような影響を与えているのかなどの関心を持っている学生もいます。自分達がたくさんの情報の中で生活し，情報に縛られつつも欠かせないものとなっていて，かなり影響を受けているという自覚もあるようです。そういった議論を学生ともっとしたいですし，卒業研究のテーマにも取り上げて欲しいです。

三宅　学生のニーズもあるということであれば，生活環境学科の専門性をメディアという領域にも膨らませることは可能なのでしょうか。

岸川　生活環境という広い意味では，少なからず要素としては入ってくると考えられます。大々的に取り上げることはせずとも，要素としてもっと取り入れることができれば面白いですね。

三宅　そうすると，本学の家政系の学科から生活環境学科と生活情報学科が派生したのは，自然の流れだったということでしょうか。

岸川　そうだと思います。研究は専門性を持って取り組むことが大切です。一方，生活環境学科全体の在り方は，「衣」と「住」だけではなく，本来は生活文化的な観点も含めて，総合的な俯瞰的な視点から「暮らし」を議論しようというものだったので

はないでしょうか。大々的にメディアという言葉を掲げなくても，そのような視点を意識しておくことは生活環境学科に必要だと感じます。

先ほどの話で言いますと，今の学生にはSNSで知り合いに情報発信することも生活の一部になっていますし，自分を他の人に知ってもらうための手段であり，良く見せないとストレスにもなっているようです。昔は，プライベートは人の目から隠すものでしたが，今はプライベートも人に見せるようになり，「自分」や「生活」というものの位置づけが少し変わってきていると感じます。そういった話を含めて広くライフスタイルを議論していくのが生活環境学科ではないでしょうか。

三宅　日頃から学生とディスカッションをされて，学生の情報も積極的に取り入れるようにされているのですね。

岸川　積極的にと言うほどではないですが，学生から教えてもらうことも多くありますね。面白いことや新しい発想に気づかせてもらえる機会でもあります。

三宅　いつも学生と一緒に研究されているなと感じています。専門的には難しいことをされていますが，いつも学生の考えがよく伝わってくる研究発表ですよね。

岸川　ありがとうございます。実際にできているかどうかはわかりませんが，そう言っていただけると本当に嬉しいです。学生には，自分で収集した情報やデータ，分析した結果を自分の言葉で自信を持って研究発表をするように指導しています。

三宅　これからの研究のトピックスは何でしょうか？

岸川　今関心があることは，ワクチンの接種に関することです。早く接種したい人もいれば，嫌だという人もいます。様々な意思表示があって当然ですし，どちらの意見も正論です。個人の意見が尊重されるべきですが，一方で「皆が打つべきだ」「ワクチンは有害だ」といった極端な意見もある中で二極化しているという指摘もあります。様々な立場の主張を聞いたうえで，個人が考えて自分の判断をして欲しいと思うのですが，極端な意見ばかりが目立ち，社会の中であまり建設的な情報交換ができていないので，それを解決，あるいは少しでもましにできないかと考えています。ただ，研究テーマとして設定するには難しい問題なのかなとも思いますが。

三宅　「二極化」という言葉が出てきましたが，どちらかに偏った意見を持つというのは，思考しようという行為自体を避けている結果なのでしょうか。

岸川　「極端な意見を好むことは自分での思考を避けている結果では」という意見はそうかなと思います。ただ，二極化がどの程度起こっているのか，どれくらいの人が偏った意見を持っているのかについては冷静に見る必要があると思います。ネットやテレビでは「二極化」は明らかに起こっているけれど，それは世間のごく一部であって，ネットへの書き込みも調査によると一割以下の人だけしか書き込んでおらず，極端に意見する人の方が積極的に情報発信する傾向があるようです。

三宅　学生はどうでしょう。「二極化」していますか？

岸川　思っているほど二極化していないと思います。レポートで自分の意見を書かせても，冷静にいろいろな情報を収集しながら精査している人が多いです。世間では極端な意見を耳にすることが多いことも，極端なことを言う人の声の方が大きいことも，学生は違和感を覚えています。このような情報量の多い社会の中でも，学生自身でしっかり考えることが，ある程度できているのではないのかなと思いますので，大きな問題はあまりないのではないかなとも思います。

異分野を組み合わせて起こる化学反応

三宅　本学科のような様々な分野が共存する場合も，情報交換をするコミュニケーションの場は必要ですね。

岸川　それは私もすごく思います。学際領域（複数の異なる学問分野による領域）では難しいことですが，コミュニケーションは暮らしの中の重要な問題でもあるので，学科でも議論した方が良いです。本当の意味での学際領域は，他分野の研究者が単に集い各々で並列に研究を行うだけではなく，他分野の人が集まって議論し新しい理論や切り口を出していくことが必要ですので，今後はそのような交流をしていくべきですね。

三宅　本学科の6コース体制では，コースの垣根をつくってしまうことになるでしょうか。

岸川　2つのコースを選択（メインとサブとして選択）して学ぶことになっていますが，コースの専門性に特化するのではなく，別々の2つのコースを「組み合わせて」新たな視点で面白いことをしていこうよ，ということが6コース制の理念です。これからになりますが（2022年度に6コース制で初の4年生が誕生），各コースでそれぞれ異なる学びを修得した学生が，卒業研究では学生同士で交流し，指導教員もそれぞれの専門を持っているとなった時に，それらが合わさることですごく面白いことが生み出せる学科にしていくべきですね。コースによる垣根はなるべく無いほうが良いですね。

三宅　そう考えると，本学科ではメインとサブの2つのコースを選択することとなっていますが，「組み合わせて」何かをクリエイティブするということが，きちんと在学生や高校生にも伝わっているか，少し気になりました。2つのコースに所属できるメリットだけでなく，「組み合わせて」何が生まれるか，化学反応の結果起こることを強く発信する必要がありますね。

岸川　確かにそうですね。ただ，準備されたものに沿った学びを欲している学生にとっては，自分で組み合わせて生み出す学びが負担になる場合もありますので，どのような学びが求められているかは検証する必要があります。

三宅　本来，大学とはどうあるべきかという問題でもありますね。そのことについてはどのようなお考えですか？

岸川　授業で学んだ知識や技術を利用して自分でさらに学びを深め，新しいことを自分で始めることができることや，そのような人を評価し共に議論できる能力を身に着けることが大学で学ぶ意義であると昔も今も思っています。問題を自分で発見し

て，自分で解決方法を模索したり，どうすれば解決できるかを自分で考えて調べ，他の人と議論しながら結果を自分の言葉で伝えることができる能力を養って欲しいと思っています。卒業研究はそういった力を養える良い機会ですよね。その一方で，今は大学としては受験生や在学生に入学や卒業するわかりやすいメリットを感じて貰わないといけない，この兼ね合いがとても難しいという問題があります。

課題となるオンライン化の検証

三宅　最近，気になっていることはありますか？

岸川　単純な興味として「遠隔授業はどうなのだろう」という点は気になります。当初は，全国的に対面授業に戻すべきという論調でしたが，学生や教員からは遠隔授業は全否定するものではないという意見が多いようです。特に講義科目は遠隔授業の方が望まれている気がします。この機会に，きちんと学生の満足度や教育効果の検証をすることが重要です。安易に元に戻すと，オンライン化が進む良いチャンスをつぶす可能性もあります。大学以外でも社会のオンライン化が強制的に急速に進みましたが，全面的に悪いことでは絶対ないので，やはり検証しておくことが重要です。企業でも在宅ワークを今後も継続するところもあれば，元に戻すというところもあります。仕事内容で不向きな場合もありますが，ライフワークバランスの面でもメリットは大きいので，社会全体でオンライン化について検証をすることが必要です。私は在宅ワークによって効率的に仕事ができるようになり，家族との時間も圧倒的に増えました。

三宅　研究も進んだのではないでしょうか？

岸川　研究は劇的に進んだわけではないのですが，学会がオンラインになったので参加がしやすくなりました。これも時間を効率的に使用できるオンライン化のメリットですね。今までの学会のように現地に移動して参加するとなると，どうしても拘束される時間がかなり長くなりますので，授業や会議などとの調整ができず参加できない時もありました。

三宅　学会として新たなトピックスもあったのでしょうか？

岸川　個人的にですが，一番大きなトピックだなと感じた点は，残念なことなのですが，今まで課題として指摘されていたこと（リスクに対するマネジメントが社会としてうまく機能していない点など）が，実際に今回も課題になっていることを再確認し，まだまだ解決できていないという事実が明らかになったことでしょうか。なので，新しい概念が出てきたというより，さらに研究を進めていかなければという意識が高まる機会になりました。新しいトピックという点では，オンライン化が進んだことによるストレスや，ライフスタイルの変化に関する調査や研究が増えています。先ほども言いましたが，コロナ禍でのライフスタイルの変化には良い面も多いと思いますので，しっかりと検証しておくことが必要だと思います。

環境をデザインするための科学的な観察や分析

三宅　ライフスタイルが変化し，身近な環境を考える機会も増え，環境をデザインする重要性も注目されていますね。

岸川　今は，家という場所が在宅ワークをする場にもなり，家に要求される要素が以前と変わってきているのかなと思います。今までそれほど大切にされていなかったパーソナルスペース，作業スペースを含めて住宅をデザインすることになっていくかもしれませんね。また，逆に家にいる時間が長くなったことで，家の中にいることの圧迫感やストレスが問題になり，家や職場以外で息抜きできるサードスペースが必要という人も増えているようです。都市計画としては，そのような人と交流する場所をデザインすることが求められるのではないでしょうか。家の中での解放感を増加させる窓などの要素や，街の中での「交流の場」は今までよりさらに重要視されると思いますので，環境デザインの領域でも注目すべきです。

三宅　環境をデザインしていく中では，統計を取りデータで社会に示していくことも重要だと聞きました。

岸川　広い意味で「科学」を考えると，生活や世の中，つまり世界を観察して，その結果をデータで表現して分析し，考察していくということが共通事項になると考えています。私は工学系の出身でもあるため，実験，調査，観察，インタビューなどのような手法で研究する際に，「まずは何かデータを取って，そのデータを元に議論していく」というスタイルが主流になりますので，統計は重要というより必須という認識です。

三宅　最近，学生に「調べてくる」ように促すと，ほぼネットだけで調べてくるので，「観察」するように言うとデータを取って調べることも増えたように感じます。

岸川　先ほどデータと言う言葉を使いましたが，無理に数値化することではなく，見たものがどのような形状だったのか色だったのかという特徴をまとめるということも含めた広い意味です。ネットの情報も単につなぎ合わせるのではなく，ネットに書かれている内容を観察したり分析することで面白いデータを得ることができると思います。

三宅　今のような情報がたくさんあふれている中では，「観察」するということがより重要ですよね。

岸川　どの分野でも今はエビデンス（根拠，証拠）が求められていて，理工学系だけでなく社会科学系の分野でも，データをとって定量的に分析することが重要視されていますね。

三宅　これから取り組みたいことは何でしょう。

岸川　今まで学会などに所属して専門分野内での研究活動に留まっていましたが，最近はその専門分野の固定観念から離れ，今までのことに捕らわれずに新しいことを始めたいなと考えています。大学に進学する時に理学系（数学物理）と工学系（環境系）で迷いつつも環境工学に進んだ理由には，純粋な自然科学だけでなく，人の生活や暮らしにも関心があり，世の中を良くするために環境問題を解決することが大事だという結構純粋な想いがありました。実際は研究活動では，論文を書くこと，

学会内で注目されるテーマに取り組むことなどを優先する必要もあり，なかなか実現できていませんでした。最近は，あまり細かい事にこだわらず，もっと自由に当初の想いを大事にして研究や社会貢献に取り組みたいと考えています。

三宅　学生も，アパレルの廃棄の問題について意識が高いです。

岸川　本学科の学生はファッションに良い意味でとてもこだわりがある学生も多いので，本来のファッションへの理想と今の大量消費，大量廃棄とが相容れないことや，環境や社会にも配慮できるアパレル業界にすることに関心がある学生が多いと感じています。アパレルに限らず今の学生はすごく社会貢献への意識が高いと思います。SDGs に貢献したいという考えも強く持っていますし，世の中を良くしていこうという社会貢献や，他の人のために良くしていきたいという純粋な気持ちを持っています。こういった素直な気持ちはとても大事だと思います。是非，そのような学生の要望に応えることができるような研究指導ができればと考えています。

――最後に，室内の快適性に関わる温熱環境を専門とされる佐々尚美准教授に，室内環境と繋がり合う様々な環境についてお聞きします。

三宅　コロナ禍で室内環境が見直されていますが，日常生活で何か気づきはありましたか？

佐々　家族全員が長時間共に過ごすことが多くなったことで，より自宅が快適に過ごせる場である事が求められますが，個々人の暑さ寒さの感覚の違いがこれまで以上に際立ち，クーラーの設定温度など，室内の温湿度調整が難しくなっているのではないかと感じました。また，自宅で過ごす時間が長くなると，冷暖房設備などを使用する時間も長くなり，消費エネルギーも増加したと考えられますので，これまで以上に，エネルギーを消費しない様な対策が必要と考えています。

図 3　室内の温熱環境について語る佐々尚美准教授

環境デザインと他コースとの繋がり

三宅　具体的に室内の温熱環境についてどのような研究をされているのでしょうか。

佐々　快適な気温には個人差があります。どの程度の個人差が生じ，その原因は何なのかを追究し，暑がり寒がりや冷え性などの人が，それぞれ快適に過ごすための室内環境の調節の仕方や，省エネに繋がる住まい方についても研究しています。

三宅　北村先生も，窓は光だけでなく景色や緑を取り入れるための手段にもなっていて，「外」と「内」との関係性にも注目されていました。温熱環境における「外」との繋がりについてはどのように考えられますか？

佐々　家の「外」に木などの緑があることで日射を遮ったり，涼しい日影ができ，夏期の室内の温度を上昇させないことにも繋がります。視点を広げると，住んでいる地域でも緑や土壌がないと気温が高くなりやすく，室内の温度もその影響を受けますので，「外」の温熱環境も「内」と関係しています。

三宅　ヒートアイランド現象は都市やまちの問題として取り上げられますが，環境デザインコースで扱っている室内環境とも関連しているのですね。

佐々　そうですね。夏期は外の暑さを住まいの中に入れない様にし，逆に冬期は太陽の熱を室内に入れ，暖かさを得るなど，住まい自体や屋外に様々な工夫をすることで，冷暖房設備の使用が減り，省エネに繋がります。また，「被服」も影響します。室内にいる人がどのようなものを身に着けているかで，同じ気温でも涼しく感じたり暖かく感じたりするなど暑さ寒さの感覚などは異なってきます。

三宅　なるほど。涼しくすごすために推奨されている「クールビズ」も，被服と室内環境と外の環境が影響し合っていると言えますね。

佐々　ヒンヤリと感じる素材や逆に暖かく感じる素材，どのようなデザインの服かなどにより，快適と感じる室内温熱環境も異なってきます。この様にどの様な服を着るか，冷暖房器具の使い方の工夫など，住まい方を工夫することによっても，省エネに繋がります。

三宅　今までに衣服から室内環境を考えたいという学生はいましたか？

佐々　まだいませんが，興味のある学生がいればと思います。健康で快適な室内環境をテーマに研究していますが，それだけでなく省エネであったり，都市やまちという「外」の環境との関連性にも目を向けて欲しいと思っています。

三宅　本学科の「被服学コース」「アパレルコース」と関連して考えれば，衣服の素材やデザインから室内環境について考えることもできます。また，「まちづくりコース」「建築デザインコース」では都市やまち，住まいと室内環境を関連させて考えることもできます。今回のお話から，「環境デザインコース」は様々なコースと組み合わせることで，異なる領域と共に健康で快適な生活環境をより良くデザインすることができると言えますね。

図 4　本インタビューを進行した三宅正弘准教授